

テーマ：「スキー学会20年の歩みと将来」

日本スキー学会が10周年を迎えた際に、「日本スキー学会10周年記念誌」が発行された。その中で、当時の三浦望慶副会長が、日本スキー学会の役割について次のように述べられていた。1) スキー研究の統合と体系化、2) スキー研究成果の活用、3) 研究成果の蓄積と伝達、の3つである。

20周年を迎えるにあたって、先の指摘にあった学会の役割を果たしてきたのか、また今後どのような役割を果たしていくべきなのか今一度考える必要がある。このようなことから、学会の主たる活動である研究について、主要な分野ごとに研究動向をまとめ、今後の課題を検討することを目的に、シンポジウムを開催することになった。

これまでスキー学会誌並びにスキー研究に掲載された論文数は301編あり、10年区分で見ると、1990年代(1991～1999年)が173編、2000年代(2000～2009年)が128編で、掲載論文数は減少傾向にあった。また、研究分野別にみると、全体では、方法学(65編、21.6%)、バイオメカニクス(57編、18.9%)、工学(55編、18.3%)、歴史学(37編、12.3%)が上位を占め、逆に経営学(2編、0.7%)、文学および環境学(3編、1.0%)が掲載数の少ない分野であった。10年区分でみてみると、バイオメカニクスが14.5%から25.0%、工学が13.9%から24.2%とこの10年間で増加傾向にあり、スポーツ医学7.5%から0.8%、体力学6.9%から0.0%と逆に減少傾向にあった。

これまで開催されてきた学会大会では、環境問題やスノーリゾート経営など、スキーの今日的課題を広く取り上げてきたが、学会誌に投稿された論文内容をみる限り、その成果はあまり上がっていないようである。このような日本ス

コーディネーター 井村 仁(筑波大学)
スキー学会の研究動向を踏まえた上で、方法学、工学、歴史学、体力学、スポーツ医学の専門家から具体的な研究動向と今後の展望について発表して頂き、今後スキー学会が取り組むべき課題について会員と検討した。

各シンポジストの発表内容に関しては、それぞれ担当頂いた先生にまとめていただいたので、それらを参照してもらいたい。

シンポジウムのまとめとして、今後の日本スキー学会が取り組むべき課題として次のようなことが挙げられた。

1、日本スキー学会は、わが国のスキー研究発展に多大の貢献をしてきた。今後も、活潑な研究活動と会員間の交流が重要である。

2、今後さらなる発展をしていくためには、日本スキー学会の特色の1つである学際性を活かした活動を展開する必要がある。多研究領域にまたがる課題研究の設定を行い、他の学会等では取り組めない研究を支援していくことが重要である。

3、スキー・スノースポーツの現場・実践に貢献できるような研究を支援することが重要である。表現を変えていうならば、スキーヤーが喜ぶ研究、興味を持って理解できる研究、社会の期待に応えられる研究であり、さらにこれまでの研究成果を一般のスキー・スノースポーツ愛好家にも理解してもらえるようにして、積極的に公開していく必要がある。その過程で、若手研究者、後継者を育成していくことも重要である。

4、他の関連団体との交流や国際化、および社会的貢献が必要である。

このような課題に取り組んでいくことが、日本スキー学会が社会に認められ、社会に貢献できる学会となっていく上で重要なことであろう。